

【講評文】 8月11日（木） 15校目

## 「キツネの箱入り」 大垣商業高校

キツネが人間の悩みを解決していくことで人間の本質を知り、人間を大切にすることが描かれていました。それによって、人間の素晴らしい一面を感じることができました。また、人間になった三女が神様にお願いをしたあとに鈴の音がなったことで、私たちの日常では感じにくい、人間と神様の繋がりを感ずることもできました。

キャストは、それぞれの役の特徴を捉え、たくさんの個性的な役が出てくることで、楽しく見ることができました。さらに、臆することなくオーバーに演じることにより、お客さんの笑いを誘い、会場を笑いの渦に巻き込む素晴らしい演技となっていました。

衣装は、3匹のキツネの衣装がごく自然で、SFや怪奇物で出がちで、いわゆる「コスプレ感」がなく、袴を制服のスカートにすることでキツネの子どもらしさも伝わってきました。また、キツネの耳が髪の毛で作ってあることで自然に見えたという意見があった一方で、色をつけるともっと分かりやすくなったのではないかという意見もありました。こうした衣装の加減は難しいものですが、実に適切な見せ方だったように感じます。

照明では、ホリの色を少しずつ変化させていくことで、自然な時の流れが演出され、時間の移り変わりもよく分かりました。しかし、人間にキツネの姿が見えているのか、見えていないのかについては講評でも議論となったように、やや分かりづらい場面もあったため、人間にキツネの姿が見えた時に少しだけ照明を変化させるなどの工夫で、その差をよりはっきりと表現できるのではないかという意見がありました。

音響では、一部音が大きすぎて、違和感のある場面があったため、電話の音などは普段、私たちが聞いている音と同じ程度の大きさにすると、劇の中で違和感なく自然に聞こえるという意見が出ました。しかし、雷の音は大きく、実際に会場で鳴っているかのような臨場感を得ることができました。

舞台装置は、まずもって目を引く大きな鳥居が見事に立っていることで、インパクトや迫力を感じ、劇が始まったその瞬間から、劇の世界に会場全体を引き込んでいました。

劇全体を通して、今までキツネたちが出会ってきた人たちが本当に思っていることが分かり、いろいろな人の生き方、考え方を知った三女的心情が、刻々と変化していく様子が、よく伝わってきました。

大垣商業高校のみなさん、上演お疲れさまでした。

(文責 岐阜北高校 2年コウ 1年ペール)